

茨城高等学校・中学校

校長室だより 2024年10月17日

日本被団協、ノーベル平和賞に思う

10月11日、ノルウェーのノーベル委員会は、今年のノーベル平和賞を日本被団協に授与することを発表しました。スマホのニュースの通知を何気なく開き、「日本被団協ノーベル平和賞」の見出しを見たときには本当に驚きました。しかし、受賞の記事を読み進めるにつれ、驚きは薄れ、代わりにいくつもの思いが静かに胸の中にわき上がってきました。

日本被団協、日本原水爆被害者団体協議会は1956年に被爆者を中心に結成された団体です。長年にわたって、国や自治体に対して被爆者への補償や援護を求める一方、国際会議などに代表者を派遣し、世界に向けて核兵器廃絶を訴える活動を続けてきました。今、なぜ被団協にノーベル平和賞なのか？という問いに対しては、ノーベル委員会自身が次のように説明しています。「核保有国は核兵器の近代化と改良を進め、新たな国々が核兵器の保有を準備しているように見える。現在起きている紛争では、核兵器使用が脅しに使われている。人類史上、今こそ核兵器とは何かに思いをいたすことに価値がある」「ノルウェー・ノーベル委員会は、生存者たちが、肉体的苦痛や辛い記憶にもかかわらず、大きな犠牲を払った経験を生かして平和への希望と関与を育むことを選んだことをたたえたい」

ウクライナ侵攻を続けるロシアは、隣国ベラルーシに戦略的核兵器を配備し、ウクライナを支援する西側諸国を牽制しています。ガザへの攻撃を止めようとしないイスラエルと、パレスチナへの連帯を示す中東の国々の間では、いつ大規模な紛争に発展してもおかしくない緊迫した状況が続いています。対立を深めるイスラエルとイランは、両国とも実質的な核保有国です。広島、長崎に原子爆弾が投下されて以来79年間、地球上で使用されることのなかった核兵器が再び使用される可能性がかつてなく高まっていることへの危機感が、今回の平和賞受賞の背景にはあるといえます。

世界で唯一の被爆国である日本は、しかし、世界の中で核廃絶の先頭に立って進んできたとは決していえません。2017年、国連で採択された核兵器禁止条約への日本の参加は、被団協などの再三にわたる要求にもかかわらず未だ果たされていません。核兵器禁止条約は、「非人道兵器」である核兵器の開発、保有、使用または使用の威嚇を含むあらゆる活動を禁止する国際条約です。日本が核兵器禁止条約への参加に消極的な理由として、日本自身がアメリカの核抑止力、通称「核の傘」によって守られているという現実があるからだ、といわれています。

核兵器が世界に拡散し、新たな核保有国が誕生する現状を前にして、核兵器禁止に懐疑的な立場の人たちからは「核兵器廃絶は理想に過ぎない。安全保障を実現するためには核による抑止力が不可欠だ」といった声が聞かれます。日本の政治家の中にも、日本が核武装する可能性を否定しない人たちもいます。そんな意見に対して、昨年まついかずみの広島原爆の日に、「核抑止論こそ非現実的」と語った松井一実広島市長のことばを筆者は印象深く記憶しています。「核抑止論に賛

成する立場の人たちは、核兵器廃絶はあくまで理想であり現実的ではないと批判する。しかし、彼らの主張は、人類を滅亡に導く核戦争は現実には起こりえないことを前提としている。ウクライナや北朝鮮など現在の国際情勢を見渡す限り、核兵器を保有する各国が実際に核兵器を使用することはありえないという立場こそ、非現実的な理想論ではないのか」というのが、松井氏の発言の要旨です。

2016年、原爆を投下した当事国のリーダーとしてはじめて、オバマ米国大統領が広島を訪れ、原爆で亡くなった方たちの慰霊碑に献花を行いました。献花を終えたオバマ大統領が、被爆者たちと言葉を交わし抱擁するニュース映像は、世界に感動をもって受け止められました。

一方でそのとき、オバマ大統領から原爆投下についての謝罪のことばが聞かれることはありませんでした。当時、自身が被爆者でもある被団協ほうようの田中熙巳代表委員は、「納得はしていません。しかし核廃絶が前進するのであれば我慢する」と謝罪は求めず、核兵器廃絶への一步を優先しました。この世の地獄と形容される原爆を経験した被爆者の方々が、たぎるような怒りと悲しみを内に秘めながらも、二度と核兵器が使われることのない未来のために決断したその思いの深さは、私たちには想像することすらできません。

核兵器廃絶への行程が容易ならぬ険しい道のりであることは間違いありません。しかし、その高い壁を前にして、私たちは思考停止に陥ってはならないと思います。核兵器廃絶を美しい物語として終わらせるのではなく、一人ひとりがあきらめずに声をあげ、その声をひとつに束ね大きなうねりと成し、粘り強く対話と行動を繰り返すこと、それ以外に未来を変えるすべはありません。日本被団協のノーベル平和賞受賞が、世界にとって大きな希望の光となり、平和構築への新たな起点となることを強く強く願います。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。